

令和6年度岡崎市教育研究大会レポート

1 11B 英語（中）

岡崎市立岩津中学校 武藤 楓

2 研究テーマ

自分の気持ちや考えを自信を持って表現できる生徒の育成

3 はじめに

小学校での英語の授業で「話す」「聞く」を中心に英語学習を行ってきた生徒が多い。小学校でなぞり書きや写し書きを中心に学習してきた生徒にとって、自己表現作文を書くことは難易度が高く、中学校での書く活動が原因となって英語に対する苦手意識が生まれてしまうことがある。英語に対する苦手意識から、英語を用いてコミュニケーション活動を行うことや自己表現をすることに対して消極的になってしまう生徒も見られる。しかし、英語で他者とコミュニケーションを取る力や自己表現をする力は生徒がグローバル社会を生きていく上で欠かせない能力となりつつあるため、書く活動において苦手意識ではなく達成感を生むことができるようにする必要があると考えた。

4 生徒の実態と研究構想、目指す生徒像

(1) 生徒の実態

生徒の実態として、本校の1年生は明るく素直な生徒が多い。学習面においては意欲的に取り組む生徒が多いものの、英語で「書く」自己表現活動が苦手である。1年生全員に実施したアンケートでは「読む、書く、話す、聞く活動のうち、苦手な活動は何か」という問いに対して多かった回答の1つは「書くこと」であった。理由として「単語が分からない」や「つづりが分からず不安」というものが見られた。また、「一番伸ばしたい力は何か」という問いに対しては、56%の生徒が「書くこと」と答えた。これまで、1学期の初めは教科書の新出文法の基本本文を書き写すことをライティング活動として行った。はじめは写すことも難しく、時間がかかった。しかし、何度も繰り返すことで書くスピードが上がり、基本本文をアレンジして書きたいという声が生徒内から出てきた。これらのことから、英語を書くことに対して苦手意識をもっている生徒は非常に多いが、それらの力を伸ばしたいと思っている生徒も多いことが分かった。私は、生徒が「自分が表現したいことを英語で書くことができた」という達成感を味わう経験を積むことで、英語に対して自信をもつことができると考えた。そして、その自信が蓄積することで、更に自信をもって自己表現できるようになると考えた。

	苦手	高めたい
1位	書くこと (73%)	書くこと (56%)
2位	聞くこと	話すこと
3位	話すこと	聞くこと
4位	読むこと	読むこと

【資料1】本校1年生の英語学習に関するアンケート結果

そこで、まずはフリーライティングの前段階として、マインドマップを補助として取り入れたライティング活動を行いたいと考えた。生徒が授業で学習した表現を利用し、自分の思いや考えを英語で書く活動を行う。その際に、身近な場面状況を提示し、教師と生徒で簡単なやり取りを行う。その後、マインドマップを書くことで思考を整理させ、作成したマインドマップを基に自己表現作文を書く活動を行う。学習した表現を用いて自己表現文を書く活動を通して、英語で文を書くことができる達成感を味わうことができるようにしたい。また、その活動を継続的に行うことで量や質が向上し、自信をもって英語で自己表現できる生徒の育成を図りたいと考える。

(2) 目指す生徒像

【目指す生徒像】

自分の気持ちや考えを自信をもって表現できる生徒

本研究における「自信をもつ」とは、

- ①生徒が自分の伝えたい内容を明確にすること
- ②生徒が自ら英文を改善すること

と定義する。

5 仮説と手だて

本研究で目指す生徒像に近づくために以下の仮説と手だてを考えた。

仮説Ⅰ 自己表現文を書くときに、思考を整理し仲間の多様な表現に触れることで、生徒は自分の思いを項目立てたり分類したりできるだろう。

<仮説Ⅰに対する手だて①>

思考を整理するために、マインドマップを書く活動を行う。

<仮説Ⅰに対する手だて②>

他者が作成したマインドマップを閲覧し、自分のマインドマップを読み返して改善する時間を設ける。(色を変えて加筆するように指示する)

仮説Ⅱ 自己表現文を書く際に、全体指導と個別の学びをスパイラルに組み合わせることで、生徒は英作文の質を高めることができるだろう。

本研究での「質を高める」とは、既習表現を使って言い換えたり、文法の誤りを正しく修正したりすることと定義づける。

<仮説Ⅱに対する手だて①>

自己表現文を書く活動を行った後に、書いた文章を仲間と読み合い助言し合う時間を設ける。

<仮説Ⅱに対する手だて②>

中間指導において、多くの生徒が困っている表現について全体で考える時間を設ける。

6 抽出生徒Aについて

本研究において研究の主な対象とする生徒Aは、普段は明るく、自ら級友や教師に質問をする前向きな姿がみられる。また、書く活動においては何度も繰り返し練習をする粘り強さがある。しかし、音読活動では、一人で正確に音読をすることが難しく、教師の支援が必要なことがある。また、やり取り型の言語活動では、自ら積極的に話かける姿はあまり見られず、少し自信がない様子である。書く活動においても、正しく書こうとするが故に自己表現をためらうことがある。この実践を通して、自信をもって自分の思いや考えを積極的に表現しようとする姿を育てたい。

7 単元計画

【単元計画】NEW HORIZON 1 Think Globally, Act Locally (Unit 9)

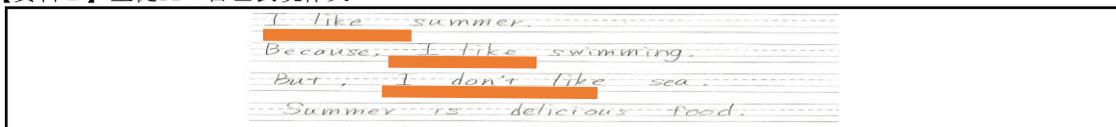
時	Part	言語活動の目的・場面・状況及び手だて
1	扉、preview	【目的・場面・状況】Let's read about Lily Smith!を学習課題に、教科書本文からリリー・スミスさんについての情報を読み取る活動を行う。 ※Which do you like, summer or winter?のトピックで自己表現文を書く活動を行う。
	Story 1	
2	Story 1	【目的・場面・状況】Let's tell about Lily Smith!という学習課題のもと、教科書本文からリリー・スミスさんについて読み取った情報をリテリングする活動を行う。
3	Story 2	【目的・場面・状況】Where do Kaito and Meg go first? という学習課題のもと、教科書本文から国際交流イベントについての内容を読み取る活動を行う。 【手だてⅠ-①】Bobに伝えたい日本の四季の情報をマインドマップにまとめる活動を行う。
4	Story 2	【目的・場面・状況】Where do Kaito and Meg go first? という学習課題のもと、教科書本文から読み取った国際交流イベントについての内容をリテリングする活動を行う。 【手だてⅠ-②】スクールタクトの共同閲覧機能を用いて、Bobに伝えたい日本の四季の情報をまとめたマインドマップを共有し、自分のマインドマップを改善する活動を行う。
5	Mini Activity	【目的・場面・状況】「校長先生に海外での修学旅行の許可をもらうために、行きたい国について紹介しよう」という学習課題のもと、行きたい国についての理由をマインドマップにまとめ、作成したマインドマップを基に行きたい国について紹介する活動を行う。
6	Story 3	【目的・場面・状況】Let's read about presentation on the main stage!という学習課題のもと、教科書の本文からメインステージでの発表の内容を読み取る活動を行う。 【手だてⅡ-①②】作成したマインドマップを基に、Bobに日本の四季について紹介する自己表現文を書く活動を行う。
7	Unit Activity 1	【目的・場面・状況】Let's make your original poster about global issues or local issues!という学習課題のもと、環境問題や健康問題、マナーなどについてのポスターを作成する活動を行う。

8 実践と考察

(1) 第1時

1時間目には、“Which do you like, summer or winter?”のトピックで、自己表現文を書く活動を行った。目的・場面・状況は特に設定せず、トピックを与え、自分の思いや考えを英文にする時間を設けた。

【資料2】生徒Aの自己表現作文



【資料3】生徒Aの振り返りシート



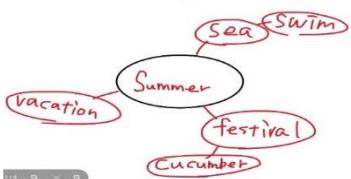
【資料2】より、生徒Aは、summer を選択し、その理由として “I don't like swimming. But I like sea.”と書いている。Topic sentence が “Which do you like, summer or winter?”であるため、summer を選択し、I like で始まる英文を書くことができたのだろう。生徒Aが書いた振り返りシートの記述には、「答え方を間違えなかったと思う。」とあり、自信をもって I like summer と答えることができたことが分かる。しかし、生徒Aは like を多用して文を作っている。Can や enjoy などのより多くの表現を用いて文章を書くことができるようにしたい。また、“Summer is delicious food.”については、恐らく “Summer food is delicious.” などと書きたかったのだろう。生徒Aが書いた文章において、夏が好きである理由が2つのみである点や like ばかり使用している点などから、伝えたい内容を明確にすることや自ら英文を改善できるようにすることが必要であると考えた。また、多くの生徒は知っている語彙が少なかったり、書く内容を思いつかなかったりすることが原因となり、書く活動において自己表現に困難さを抱いていた。そのため Unit 9 では、生徒の伝えたいという動機づけを高めるために、英語で伝える必然性のある身近な目的・場面・状況を設定する。また、自己表現作文を行う際の手助けとなるように、マインドマップを用いて思考を整理し、作成したマインドマップを基に自己表現作文を書く活動を行うことにした。さらに、書いた自己表現作文を仲間と読み合い、自分の自己表現作文を振り返ったり、互いに助言し合ったりする時間を設けることで内容を明確にしたり英文を改善したりする姿を目指す。

(2) 第3時

3時間目は、以下の手順で活動を行った。

①四季のない国パラオに住むボブに、日本の四季について伝えるための文章を書くという場面を提示する。

“Do you know season? For example, spring. Four season is spring...”などという教師と生徒のやり取りの中で、season や tell などの単語を復習した。日本には四季があるが、パラオには四季がないということを伝えると、「一年中同じ服を着るのかな?」「そんな国があるのか!」という反応が返ってきた。日本で育ち四季があることが当たり前である生徒にとって、四季のない国があることは驚きであっただろう。そのような異文化に触れ、自分たちの暮らしと違う点を見つけることで Bob が知らないことを伝えたいという意欲が湧いたのではないかと考える。また、Bob が13歳で生徒と同年齢である情報を伝えると、「Bob は数学好きかな?」などと Bob に対しての質問をつぶやく生徒がいた。Bob が同年齢という設定にしたことで、Bob に対しての親近感をもつことができたのではないかと考える。

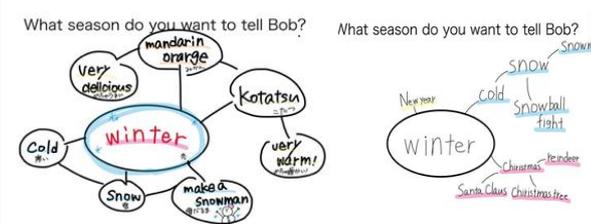
<p>【資料4】場面や状況を提示する際のパワーポイント</p> 	<p>【資料5】Teacher Talk の原稿 He is Bob. He lives in Palau. We have four seasons in Japan. But Palau does not have four seasons. He will come to Japan next month. <u>He wants to know about your favorite season.</u> Let's tell him about your favorite season!</p>	<p>【資料6】教師のモデルマッピング</p> 
--	--	---

②教師が夏について紹介するマッピングのモデルを見る。

【資料6】のように教師はマッピングを示し、口頭でボブに伝えたいことを紹介した。We go to summer festival in summer. We can eat delicious cucumber!と教師が話すと、「apple candy!」や「fried noodles!」などと Unit5 で学習した単語をつぶやく生徒がいた。また、「おれは断トツからあげだな!」という意見も出てきた。これらの様子から、教師のモデルを見ることは、生徒が自分の考えを整理することができる機会になっていることが分かる。さらに、教師のモデルマッピングはあえて広がり不十分なマッピングにし、生徒が自分で考えを整理し、広げることができるようにした。実際に提示したところ、「今日の先生のマッピングは(内容が)少ないな。おれもっと書けるぞ。」と言う生徒がいた。この姿から、教師のモデルマッピングが生徒の学びのきっかけとして位置づけられたことが分かる。

③ボブに伝えたい季節を1つ決め、その季節について伝えたい内容をマッピングにまとめる活動を行う。(スクールタクト)

文章を書く場面と教師のモデルを見たうえで、教師の四季の中から伝えたい季節を決める際に、「ボブって雪は見たことあるかな?」「さくらはきっと見たことないよな。」などというつぶやきが多く出てきた。パラオにはクリスマスがあるかどうか調べ始める生徒も出てきた。これらの姿から、身近で伝える必然性のある目的・場面・状況を設定することで、伝えたいという意欲が増したのではないかと考える。

<p>【資料7】その他の生徒のマッピング</p> 	<p>【資料8】その他の生徒の振り返りシートの記述</p> <table border="1"> <tr> <td data-bbox="750 1769 1133 1904"> <p>出来たこと</p> <p>単語を英語で書けた。書けたことをさらに繋げることができた。</p> </td> <td data-bbox="1149 1769 1436 1904"> <p>出来たこと</p> <p>自分が紹介したい季節に対して、いろんな案を出して、マッピングに書くことができた。</p> </td> </tr> </table>	<p>出来たこと</p> <p>単語を英語で書けた。書けたことをさらに繋げることができた。</p>	<p>出来たこと</p> <p>自分が紹介したい季節に対して、いろんな案を出して、マッピングに書くことができた。</p>
<p>出来たこと</p> <p>単語を英語で書けた。書けたことをさらに繋げることができた。</p>	<p>出来たこと</p> <p>自分が紹介したい季節に対して、いろんな案を出して、マッピングに書くことができた。</p>		

また、多くの生徒が単元の最初に書いた文章の内容は2つほどであったが、【資料7】から分かるように、マッピングを

作成することで多くの生徒の枝分かれが3つ以上に増えた。マッピングを作成することによって一つの内容から関連した内容に繋げることができ、より具体的な内容を書くことができていくことが分かる。【資料8】の生徒の振り返りシートには、「繋げることができた」という記述が多く、マッピングを作成することで生徒の思考が整理されていると言えるだろう。

【資料9】生徒Aのマインドマップと振り返りシートの記述



生徒Aは、【資料5】下線部のように最初に教師が **He wants to know about your favorite season.** と投げかけたことで自分の好きな季節を想起し、【資料9】のように **winter**、クリスマス、お正月を書くことができたのだろう。しかし、**winter** から広がる内容はクリスマスとお正月のみであった。【資料9】の生徒Aの振り返りには「早く季節を決めて書きたい。」という記述があり、恐らく、ボブに伝えたい季節を決めることに時間がかかったのだろうと思う。そのため、マップを書く時間をもう少し長く設けることで生徒Aはマップをより広げることができるのではないかと考える。また、「すぐに季節を選び、マッピングを大きくしたい。内容を増やす。マッピングしたことを文にして説明できるようにしたい。」という記述から、ボブに伝えたいことをマッピングに整理することで、内容を増やしたり思いや考えを英語で発信しようとしたりすることができた。

(3) 第4時

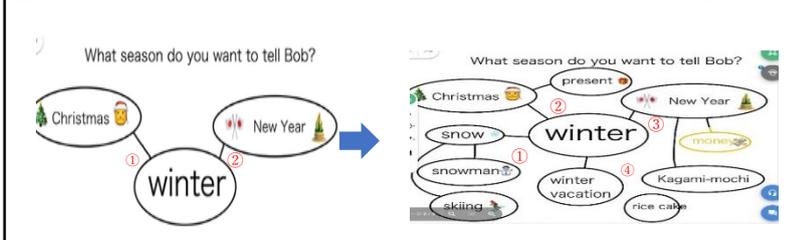
4時間目は、スクールタクトの共同閲覧機能を活用し、他者が作成したマインドマップを閲覧し、自分のマインドマップをふり返る時間を設けた。また、他者のマインドマップを閲覧し、自分のマインドマップを改善する際には、【資料10】のように指示を出した。活動に移る前に、教師が大型テレビに教師のモデルマッピングを映し出し、加筆するやり方を示した。

【資料10】加筆するやり方の指導

- ・他者のマッピングを見て、取り入れたい部分を見つける。
- ・取り入れたい部分がある場合は、自分の考えのみで書いたマッピングとは違うペンの色で加筆する。
- ・他者のものを参考にして上手に自分のものに取り入れることができることは、自分を高めることであることを伝えた。
- ・英語での表現が分からず日本語で書いている場合、英語で表現している仲間がいたら参考にできることを伝えた。

活動の最中には、他者のマインドマップを見て、「お年玉って英語で **New Year's money** と言えるのか」というつぶやきや「確かに、バーベキューは毎年やるな」というつぶやきがあった。生徒Aは、他者のマインドマップを見る前に、前時に書き足りなかった部分を書き足していた。その後、他者のマインドマップを見た後に **New Year** の部分に **money** を加筆していた。また、鏡餅と書いていたが、他者のマインドマップを見た後に **rice cake** と加筆していた。【資料11】

【資料11】生徒Aのマインドマッピング (共同閲覧前 [左] と後 [右])



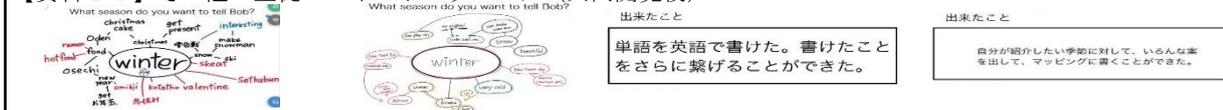
【資料12】生徒Aの振り返り

出来たこと

友達が書いているマッピングを見て、自分の足りないところを補えたり、これもあったと発見できた。

【資料12】のように、生徒Aの振り返りには「友達を書いているマッピングを見て、自分の足りないところを補うことができたし、これもあったと発見できた」と書かれており、他者のマインドマップを見たことで、新たに伝えたい内容が増えたり、英語での表現が増えたりしたことが分かる。また、生徒A以外の生徒においても、他者のマインドマップを見たことで、新たに伝えたい内容が増え、マインドマップの枝分かれが多くなったり、共有前と比較して英語での表現が増えたりしていた。夏と冬を選択した生徒の人数は多く、互いのマインドマップから良い影響を受けている様子が見受けられた。しかし一方で、春を選択している生徒の人数は少なかつたため、春を選択した生徒のマインドマップの広がりはそのほかの季節を選択した生徒に比べて小さかった。生徒からは、「春の人が少なくて参考にできない」というつぶやきがあり、人によって活動の効果に差が出てしまうという課題が残った。

【資料13】その他の生徒のマインドマッピング (共同閲覧後)



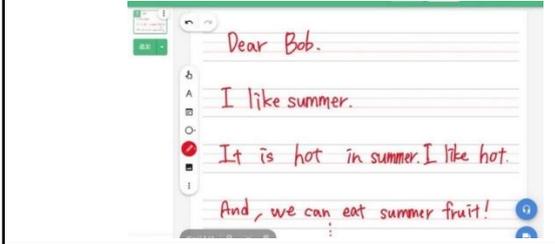
(4) 第6時

作成したマインドマップを基に、日本の四季の中で **Bob** に伝えたい季節についての文章を書く活動を行った。はじめに教師のモデル文章を提示し、マインドマップを基に一人で文章を書く時間を取った。その後、チームの仲間と書いた文章

の読み合いをし、相談しながら自分の文章を改善できる時間を設けた。活動後には、活動の振り返りを行った。

マインドマップを基に一人で文章を書く前に、【資料14】のように教師の簡単なモデル文章を提示し、書き方がよく分からない生徒のためにモデルを示した。低位の生徒でも、教師のモデル文章を参考にして3文は書けるように、モデル文章には最初の3文と挨拶を書いた。【資料18】から分かるように、生徒Aは書き始めを教師のモデル文章【資料14】を参考にして書くことができた。その他の生徒も、全員3文以上は書くことができていたことから、教師のモデルが生徒の自己表現に向かうきっかけとなったことが分かる。

【資料14】教師のモデル文章



【資料15】全体指導において教師が伝えたこと

- ①文法の間違いを確認する
 - ・ can の後ろは動詞の原形。
 - ・ like の後ろに動詞はこない。I like dance.ではなく、I like dancing.
 - ・ 文のルール（文頭は大文字、g や h の書き方）
- ②文の意味が分からない部分は相手に聞く
- ③困っていることをチームで相談する

チームの仲間と英作文の読み合いをする前に、【資料15】のように全体指導において、文法の間違い（can の後ろは動詞の原形であることや like の後ろには動詞はこないことなど）を確認することや、分からない部分を相手に尋ねることなど、読み合う際の視点を与えてから活動を始めた。また、机間指導中には知っている言葉で言い換えるように助言した。活動が始まると、生徒Aは隣の席の生徒に、「お年玉をもらうってどうやって言うのかな？」と問いかけていた。その後、チームでお正月にお年玉がもらえるという表現を考えていたところ、隣の生徒が「もらう」というジェスチャーから get という表現を思いつき、「get money じゃない？」という意見を出した。生徒Aが「もらえます=もらうことができますと考えて、can get にするのはどうかな」と発言すると、生徒Aの前の席の生徒が“**We can getting money?**”とつぶやいた。すると、生徒Aの隣の席の生徒が“**can の後ろは？動詞の原形？**”とチームに問いかけ、動詞の原形というものが ing や s がつかないことをチームで確認することができていた。そのため、生徒Aは“**We can get money.**”という文を書くことができた。生徒Aの隣のチームもお年玉をもらえるという表現で悩んでいたが、生徒Aのチームのメンバーが助言をしたことで英文を書くことができていた。その他にも、「**not は be 動詞の後ろに来るんだよ。**」と文法面で助言する声や、「**Christmas のつづりが違うよ!**」と気づきを伝える声が聞こえてきた。さらに、多くの生徒が「冬にはクリスマスがあります」という英語に困っており、【資料17】のように中間指導においてみんなで考える時間を設けた。

【資料16】生徒Aのチームの会話

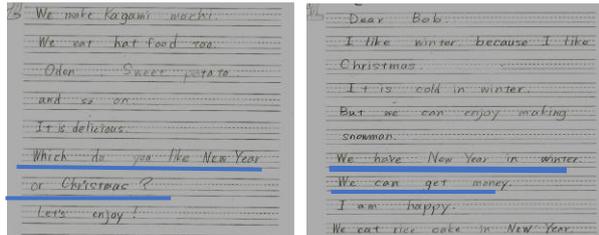
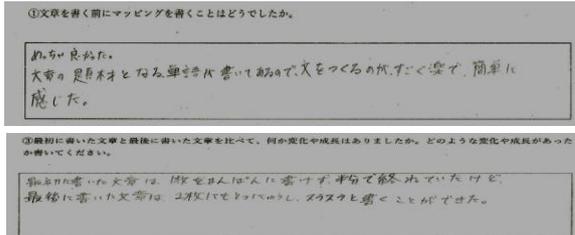
- 生徒A：お年玉をもらうってどうやって言うのかな？
生徒B：どうやって言うんだろうね。お年玉はお金だから money だよ、Money をもらう…もらう…。（もらうジェスチャーをしながら）get でいいかな？ get money はどう？
生徒A：きっと伝わるね！良いと思う。
もらえますはもらうことができますと考えて、can get にするのはどう？
生徒C：じゃあ、We can getting money?
生徒B：え、でも can の後ろは？動詞の原形…？
生徒C：原形って？
生徒B：ing とか s とつかないってこと。
生徒A：じゃあ、We can get money. にしよう。

【資料17】中間指導において教師が行ったこと

- ・「冬にはクリスマスがあります」を英語でどのように言うか全体に問う。
- ・似た文が教科書に出てきたことを伝え、考えたり探したりする時間を設ける。
(Unit6 story1: Cebu has many beautiful beaches.)
- ・「夏には夏祭りがあります」をどのように言うか全体に問い、考える時間を設ける。

“Cebu has beautiful beaches.”という教科書の文を思い出した生徒や、過去に“**We have Higashi park in Okazaki.**”という表現を学習したことを思い出した生徒から have を使う意見が出たため、“**We have Christmas in winter.**”という表現にたどり着くことができた。その後、再度自分の文章を改善する時間を設けたところ、【資料12】から分かるように、生徒Aは“**We have New Year Day in winter.**”という文をつけ足すことができた。また、“**I am happy.**”“**It is delicious.**”と自分の感想をつけ足したり、“**Which do you like, New Year or Christmas?**”と Bob への質問文を書いたりすることができていた。【資料2】と【資料18】を比較すると、生徒Aが最後に書いた自己表現作文は2枚目に突入し、量が大幅に増えたことが分かる。また、単元前の文章では like ばかりを使用していたが、最後に書いた文章では動詞や助動詞などの表現のバリエーションが増えた。生徒Aの振り返りには、知っている単語で文を書くことができたことや、同じチームの仲間にと相談したことで書くことができたことが書かれていた。今回は一文の長さが短かったため、もっと長い文で自分の気持ちを伝えられるようになりたいという記述も見られた。このことから、英語で文章を書けるようになりたいという生徒Aの気持ちが高まったことが分かる。【資料19】のように、文章を書く前にマッピングを書いたことについてのアンケートでは、生徒Aはマッピングを基に文章を書くことが簡単になったという内容を書いた。単語で悩む時間が少しでも減ったことで文を作りやすくなったのだろう。その他の生徒の自己表現作文も、文の量と内容が共に大幅に増えていた。特に、英語が得意でない生徒が仲間から良い影響を受けて自分の書きたいことを仲間のサポートを受けて書こうとする姿が見られたことから、チームで互いを高め合う活動の良さを感じた。チームで相談できる時間を設けたことで新たな表現を取り入れることができる生徒が多かったが、一方で、書くことに時間がかかる生徒が多く、4文以上程度の文章を書くことができていない生徒がいないチームは、改善の幅が小さかった。チームによって完成した自己表現作文の

出来に差がある点が課題として残った。

<p>【資料18】生徒Aの自己表現作文</p> 	<p>【資料19】生徒Aの振り返り</p> 
---	--

9 検証と課題

(1) 検証

仮説Ⅰ 自己表現文を書くときに、思考を整理し仲間の多様な表現に触れることで、生徒は表現したいことを英語で表現してみることができるだろう。

【仮説Ⅰの手だて①について】【資料9】から、生徒Aは好きな季節である冬の魅力を Bob に伝えるという活動の目的を理解し、項目立てで、winter という一つのテーマからクリスマス、お正月というように関連する内容を広げることができた。記述には、「マッピングを大きくしたい」とあり、更に活動を続けて【資料11】右側の通り項目立てを増やして分類し、伝えたい内容を明確にすることができている。【資料12】より、生徒Aの振り返りシートには、伝えたい季節についてのマッピングを書き内容を増やすことができたことが書かれていた。このような生徒の姿から、マッピングを書いて思考を整理する活動を取り入れることで、伝えたい内容を明確にすることができていることが分かり、「自分の気持ちや考えを自信をもって表現できる生徒」につながっているとと言える。

【仮説Ⅰの手だて②について】スクールタクトの共同閲覧機能を活用し、他者が作成したマインドマップを閲覧する時間を設けたことで、新たに伝えたい内容が増えたり、英語での表現が増えたりする生徒の姿が見られた。【資料12】のように、生徒Aは、他者のマインドマップを見た後に New Year の部分に money を加筆していた。また、鏡餅と書いていたが、他者のマインドマップを見た後に rice cake と加筆していた。【資料12】生徒Aの振り返りには、友達のマッピングを参考に自分の足りないところを補うことができたという内容が書かれていた。これらの生徒のマッピングや振り返りの記述から、スクールタクトの共同閲覧機能を活用し、他者が作成したマインドマップを閲覧する時間を設けたことで、他者からの影響を受け、自分の内容や新たな表現を増やすことで伝えたいことを明確にする生徒の姿が見られた。以上のことから、仮説Ⅰの手だて②は有効であったと言える。

仮説Ⅱ 自己表現文を書く際に、全体指導と個別の学びをスパイラルに組み合わせることで、生徒は英作文の質を高めることができるだろう。

【仮説Ⅱの手だて①について】自己表現文を書く活動を行った後に、書いた文章を仲間と読み合い助言し合う時間を設けたことで、生徒は自分の文章を客観的に振り返り、文章の表現の幅を広げることができた。生徒Aは、チームの仲間と分からなかった表現を考え、知っている単語で表現することができた。また、チームの仲間と読み合いをしたことで、【資料18】から分かるように、生徒Aは自分の感想をつけ足したり、Bob への質問文を書いたりすることができていた。生徒Aの振り返りシートには、知っている単語を使って書きたいことを書くことができたことや、分からなかった表現をチームの仲間と相談して書くことができたことが記述されており、既習表現を用いて表現できたことが分かる。生徒Aの単元前の自己表現作文は4文であったが、最後に書いた自己表現作文は2枚に渡って書くことができていた。既習表現を用いて英語での表現を考えたり、自分の英文をより正確に改善する姿から、自分の気持ちや考えを自信をもって表現できる生徒の姿につながると言える。これらのことから、仮説Ⅱの手だて①は有効であると言える。

【仮説Ⅱの手だて②について】中間指導において、多くの生徒が困っている表現について全体で考える時間を設けたことで、自分の英文を正しく改善し、新たに英文を書こうとする姿が見られた。多くの生徒が「冬にはクリスマスがあります」という英語に困っており、中間指導において、みんなで考える時間を設けた。【資料18】より、中間指導前の生徒Aは、have を使った文章を書いていなかったが、中間指導を挟んだことによって、"We have New Year in winter."と文を書くことができていた。中間指導を挟んだことで、生徒が文章の内容をより具体化するなど自ら改善したことが分かる。これらのことから、仮説Ⅱの手だて②は有効に働いたと言える。

(2) 今後の課題

今回の実践を通し、自己表現文を書く際にマインドマップを用いて思考を整理し仲間の多様な表現に触れることで、伝えたい内容が増えたりより具体的な内容を表現できるようになったりするなど、生徒は自分の伝えたい内容を明確にすることができた。また、自己表現文を書く活動を行う際に、個人で書く時間を設けた後、チームの仲間と読み合い助言し合う時間を設けることで、生徒は客観的に自分の英作文を振り返ることができるため、自ら英文を改善する姿が見られた。しかし、今回の手だてによって全ての生徒が本当に表現したいことを自信をもって表現することができたわけではない。生徒にとって身近である物事に対しての英語の語彙力を高めることや、知っている単語で言い換えたり表現したりする力の育成がさらに必要である。生徒が「自分の本当に伝えたいこと」を自信をもって表現することができるように、今後も精進していきたい。